

月例研究会 (2014年5月28日)

カルチュラル・トラウマ論の検討

——公共圏論との関係をふまえて

兼子 論

本報告では、アメリカの理論社会学者であるジェフリー・アレクサンダーらによるカルチュラル・トラウマ論の検討を行った。

カルチュラル・トラウマ論は、心理学および精神医学の見識を踏襲しつつも、集合体（特にネーション）レベルで、ある出来事をめぐる記憶が「拭いきれない」ものとしていかに表象されるのか、またそれが集合体のメンバーらによって受容あるいは拒絶されるのか、という点に関心を置く。またカルチュラル・トラウマ論は、トラウマへの集合的な反応は集団間の闘争として出現し、さらにこの闘争が、集団の政治経済的な要求にかかわる象徴闘争という性格をもつと主張する。さらにこの闘争は、強制的な回避と強制的な誘引をめぐる葛藤として顕在化することで、政治的な分極化や政治闘争を引き起こすとも述べる。

とりわけ、記憶のトラウマ化が政治闘争を引き起こすというのは、それが“単なる”象徴闘争ではなく、社会的資源の配分や接近にかかわることを意味している。また彼らは、表象や言説の対象としてのオーディエンスの重要性を強調するが、それは、表象や言説による記憶のトラウマ化が当事者ではない人々にいかに受容されるかが、社会的資源への接近に重大な影響を与えるという認識に基づいている。そしてこのような理論的立場をふまえて彼らは、アメリカの奴隷制やWWIIにおけるドイツのホロコーストといった、ネーションレベルでのトラウマ的

な記憶をめぐる表象や言説について分析を行う。

それでは、カルチュラル・トラウマ論の知見とは何か。第一に挙げられるのは、トラウマ的記憶の「拭いきれなさ」の定着をめぐるプロセスがもつ、個人と社会での相同性を明示する点である。第二の、より重要な知見は、集合体としての「拭いきれない」記憶の表象の場としての公共的な言説空間が、ハーバーマスの意味での論議や対話に基づく公共圏というだけでなく、物語性やパフォーマンスに基づく言説の場としての性格をもつことを明らかにする点である。例えばドイツのホロコーストをめぐるさまざまな学問的論争は、一方では真か否かをめぐる専門家同士でのコミュニケーションであるが、他方で論争自体が国民的な関心の的になることで、国民儀礼的な性格をもつことを余儀なくされる。その結果としてホロコーストをめぐる学問的探究は、ますます個々の市民の嗜好対象になる。このことは、市民をオーディエンス化することに貢献してしまうことから、学問の公共性をめぐる困難が露呈することになる。

このように考えると、カルチュラル・トラウマ論の意義は、集合体レベルでのトラウマ的記憶が言語化によって公共性を獲得することがはらむパラドックスを開示する点にある。あるトラウマ的記憶がそれを直接経験していない多くの市民に受容されることは、その反面として、トラウマ的記憶を日常化することで出来事のもつ衝撃や共有不可能性を縮減させ得る。だが、その共有不可能性に執着すれば、より広い市民の関心を得ることで社会的資源に接近する道を閉ざしてしまうかもしれない。現代における集合的記憶の想起や忘却をめぐるさまざまな動きを分析する上で、このパラドックスへの着目はさまざまな示唆をもたらすだろう。

(かねこ・さとし 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)